

第1学年7組 道徳指導案

- 1 主題名 友情の在り方〔内容項目B-（8）：友情の尊さ〕（1時間完了）
（資料名 「赤い屋根」 出典：本校校長自作資料）

2 ねらい

母親の運んできたケーキと紅茶をぶちまけた病気の親友（陽ちゃん）に対して、注意した親友（敦夫）と何もできずに悩んでいる主人公の気持ちを比較して考えることを通して、互いの個性や立場の違いに気づき、心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合っていこうという道徳的実践意欲を高める。

3 ねらいとする道徳的価値

自我に目覚めつつある中学生の時期は、親や教師などの頼っていた存在から精神的に独立し、互いの心を許し合える友人を真剣に求めるようになる。しかし、心を許し合うとはいえ、お互いに与え、与えられる信頼関係を確立することは簡単ではない。特に、中学1年生の段階では、視野が狭く、自己中心的になりがちである。相手に対する要求が高かったり、自分の在り方を省みずに相手の行為を責めたりするといったことが多く見受けられる。また、相手の気持ちを推しはかることもままならず、立場の違いがあると相手の辛さや苦しみについての確かなとらえがさらにできなくなってしまう。

本時の指導を通して、真の友情とは、お互いが、それぞれの立場を知り、その状況や心理をよく理解した上で相手の成長を心から願って励まし合い、高め合うことだと気づかせたい。

4 ねらいとする道徳的価値に関する生徒の実態と願い

（1）学級について

本学級は、明るく活発な生徒が多く、男女関係なくおおむね仲が良い。道徳の授業では、最初の一部の生徒ばかりが発言をしていたので、本音を言えるような雰囲気づくりや互いの意見を受け入れる姿勢を育ててきた。

1学期では、自然教室を通して集団としての仲間意識や絆が深まり、互いのよさを認め合うことができるようになってきた。その一つとして、相手が自分に対して手助けしてくれたことを感謝するようになってきたことがあげられる。また、友達に対して自分の意見や考えを互いに伝えられるようになってきた。

しかし、仲間同士の気安さから、冗談半分でのからかいや嫌がる言葉を平気で言ったり、いたずらやちょっかいをかけたりするなど、他者への思いやりが欠如した場面も見られる。自己中心的な行動や冗談が過ぎるなど、ささいなことから感情の行き違いが生じ、傷つけ合うこともある。

この資料を通して、立場が異なったときの友情の在り方の難しさについて考えさせ、お互いに心を通い合わせることでできる友情こそが本物であると気づかせたい。真の友情の在り方や友情の尊さについて考えさせ、友情を今よりいっそう確かなものにするために互いに励まし合い、高め合っていこうとする気持ちを育てたい。

（2）抽出生徒について

①抽出生徒Aについて

Aは明るく元気で友達が多く、学級を盛り上げる存在である。4月当初から授業や行事に積極的に取り組み、自然教室の歌声実行委員や体育大会の応援副団長を務めた。交友関係を見ると、いつも輪の中心となり、楽しそうに過ごしている。ただ、人の気持ちをあまり深く考えないために軽率な言動をとりやすく、知らず知らずのうちに級友を傷つけてしまうことがあった。また、相手も自分と同じ気持ちでいるだろうという感覚の友達付き合いをしている。自分よりも周りの気持ちを優先しようという抽出生徒Bの考えにふれることを通して、Aが自分の考えと比較して考えることを期待する。この授業を通して真の友情とは何かを考えさせたい。

②抽出生徒Bについて

Bは思いやりがあり、責任感が強い。誰かが困っているとさっと手を差し伸べたり、相手に応じて声をかけたりすることができる。現在は男女分け隔てなく接しており、学級の多くの生徒から信頼を得ているBだが、小学校の頃に友達との付き合い方で悩んでいる。6月の国語の授業で取り組んだ生活作文では題材を「友情」とし、誰かのために何かできる人になりたいということと、学級のいろいろな立場の人と信頼を築きたいという自分の思いを書いた。Bの意見を全体の場で取り上げることでBに自信をもたせると同時に、視野を広げさせたい。

5 資料について

(1) 資料の概要

主な登場人物は主人公「僕」と陽ちゃん、敦夫である。3人は陽ちゃんちの赤い屋根の上で友情を築いてきた、小学校時代からの親友だ。陽ちゃんは小学校6年生から病気で学校へ来られなくなった。中学校の入学式にも陽ちゃんは出られなかったが、偶然にも3人は同じクラスになった。「僕」と敦夫は先生からいろいろと渡すものを預かって、陽ちゃんちに一週間に一度行くようになる。しかし、だんだん元気がなくなっていく陽ちゃんを見て、「僕」と敦夫は学校の楽しい様子を話すのはやめようと約束する。ある日、おばさんが運んできたケーキと紅茶をむちゃくちゃにぶちまけてしまう陽ちゃん。おばさんは泣きながら片付け、出て行く。敦夫は陽ちゃんに注意するが、「僕」は何も言えずに帰るのであった。その後、「僕」は陽ちゃんちへ行けなくなる。敦夫は僕を誘うが、歯切れの悪い返事をする「僕」にそれ以上何も言わない。陽ちゃんのことを心配しつつも、陽ちゃんに会う自信もなく、今どうしてよいのか困っている「僕」の葛藤が描かれている。

(2) 「耳をすまして、学びを拓く」ための資料の生かし方

①資料との対話をさせるための手だて

学級の実態を把握するために事前アンケートを行い、「親友」とはどういう存在であるかを確認しておく。そのうえで、「ア だめなことやいけないことについては、毅然と注意してくれる存在」という考えをもつ生徒、「イ 自分が困ったり、辛かったりする時に、慰めたり、助けたりしてくれる存在」という受動的な考えをもつ生徒を意識しておく。授業の冒頭では、そのアンケートに記載した内容を発表させて、資料に入りやすくする。資料の範読の際、読み取りに陥らないように、注目させたい箇所（登場人物・発問で取り上げる箇所等）に横線を引いておく。その後、自分の考えをワークシートに書かせ、深めさせる。

②他者との対話、自己内対話をさせるための手だて

資料をもとにした二つの発問に対してそれぞれ「批判論」「弁護論」をかみ合わせながら授業を進行していく。一つ目の発問における批判論に対しては、共感を示しつつ、注意した敦夫自身も、それでよかったのか迷っていることに目を向けさせる。また、弁護論に対しては、うなずきながら受け止める。さらに、自分だったらどうするかという視点を交えた発言については評価し、そういう視点をもって考えるよう促す。

二つ目の発問における批判論に対しては「行かない（行けない）」という事実だけにとらわれるのではなく、そういう選択をしたことに至るまでの主人公の心の葛藤に気づかせる。最終的には、主人公のとった行動を考えさせることで、互いの立場や個性を尊重しつつ、心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合おうという気持ちになってほしい。

③自己内対話をさせるために手だて

最後に資料には書かれていない話の続きを紹介して、授業をふり返ることで、自分の友情の在り方を見つめ直し、友情をさらに深めていこうとする意欲を高めさせる。

6 板書計画

<p>三</p> <p>一年生の終わり頃までには陽ちゃんの病気もよくなり、三人の友情はいつそう深まったそうです。その間に主人公や敦夫はどんな行動をとったと思いますか？</p> <p>真の友情</p>	<p>二</p> <p>陽ちゃんの家に行こうという敦夫の言葉に、歯切れの悪い返事をし、結局行かなくなった主人公を、どう思いますか？</p> <p>■批判</p> <p>陽ちゃんのことを考えたら行くべき。 接点をもたなくなったから友情は成り立たない。</p> <p>■弁護</p> <p>自分だったとしても何もできない。</p> <p>悩んでいる</p>	<p>一</p> <p>陽ちゃんがケーキなどをぶちまけたとき、何も言えなかった主人公を、どう思いますか？</p> <p>■批判</p> <p>親友だったら嫌われても言うべきだ。 お母さんがかわいそうだし、いけないことはいけないと言わなければならない。</p> <p>■弁護</p> <p>自分も同じ立場だったら同じことをやってみよう。 二人で責める必要はない。</p>	<p>「赤い屋根」</p> <p>親友</p> <p>僕 中学：同じクラス</p> <p>陽ちゃん</p> <p>敦夫</p>
---	--	--	---

	<p>陽ちゃんの本心は、きっと二人に来てほしいと思っているはず。会える会えないではなく、行くべきだ。(⑥)</p>	<p>自分も同じ立場に立ったら陽ちゃんやおばさんの気持ちを考えてしまって行けなくなると思う。</p>	<p>ていいか、本当に困っている」という叙述に気づかせ、どうするか考えさせる。(⑧ E:ゆさぶる) また、出ないようであれば、どうして敦夫は無理強いをしなかったのだろうかと問いかける。(⑦ E:ゆさぶる)</p>
	<p>陽ちゃんとの接点をもたなくなれば、友情なんて成り立たない。陽ちゃんが立ち直れるまで通い続けろ。(⑦)</p>	<p>時間はかかるかもしれないけれど主人公は一生懸命悩んでいる。答えが出るまでは仕方ないと思う。(⑧)</p>	<p>※抽出生徒Bを意図的に指名し、Bの友達に対する考え方を語らせることで、周囲の生徒が「友情」について考えを深められるようにする。</p>
<p>4 5</p>	<p>1年生の終わり頃までには陽ちゃんの病気もよくなり、3人の友情はいつそう深まったそうです。その間に主人公や敦夫はどんな行動をとったと思うか。</p>		<p>☆「主人公」の葛藤に気づくことができたか。</p>
<p>敦夫に引っ張られて陽ちゃんに会いに行く。</p>	<p>敦夫と一緒に陽ちゃんの気持ちにたって、そばにいてあげたり、笑わせたりしてあげる。</p>	<p>(発言、ワークシート)</p>	<p>※ワークシートに自分の考えを書かせ、数人に発表させる。</p>
<p>主人公が自分や敦夫の思いを手紙に書いて、お母さんに渡す。それが陽ちゃんの心を動かし、また3人の友情が深まる。</p>	<p>※陽ちゃんを思った前向きな意見を取り上げることで、ふり返りの代わりとする。</p>	<p>※抽出生徒Aを意図的に指名して発表させることで、相手の立場を考えた言動をした温かい気持ちを評価する。</p>	
<p>互いの立場や個性を尊重しつつ、状況に応じて、友達とのかかわり方を誠実に模索していこうとする気持ちを高める姿。</p>		<p>☆友情を深めることの難しさに気づくとともに、互いの立場や個性、あるいは状況を考えて、互いに高め合える関係を構築していこうという気持ちをもつことができたか。</p>	
		<p>(ワークシート、発言)</p>	

授業の視点

- ① 色カードを使い、「批判」と「弁護」に分かれて意見を出したことが、自分とは違った考えにふれ、考えを広げるうえで有効であったか。
- ② (⑧)の意見が出なかったときに補助発問をしたことは、相手の気持ちに立って物事を考えさせるうえで有効であったか。